

実質と形式

モノ・コトの用法から

村 田 昌 巳

1. はじめに

拙稿の目的は、日本語において非常に基本的な語であるモノとコトについて、現代短編小説10篇における実例をもとに、統計的考察も含めて、実質用法から形式用法への広がり^①を観察し名詞の持つ機能性を考察することにある。

2. モノとコト

2.1 概説

モノ・コトは意味の抽象度が非常に高い語であり、修飾語を受けることが多く、一般に形式名詞と称される用法が多い。形式名詞という範疇は国文法において既に確立されたものであるが、異議を唱える論考も少なくない。モノ・コトが修飾語を受けずに名詞として立つ場合もあることを考えれば、実質名詞と形式名詞の二項対立を前提に名詞を下位範疇に分類するアプローチよりも、「名詞全体を機能する品詞」〔高市（1986：79）〕と位置付け、その実質用法と形式用法の連続性に着目する研究方針の方が支持される。また、モノ・コトは、名詞という範疇を超え接続助詞・終助詞等として（あるいはそれらの一部として）用いられるが、内容語である名詞から機能語である助詞への展開を見せるという点は、近年研究の盛んな「文法化」と呼ばれる現象の一面である。

拙稿では、モノ・コトの多岐にわたる用法を実質と形式の連続性において捉えるという立場に立ちながら、モノ・コトが実際にはどの程度実質的にあるいは形式的に使用されるのかを観察することにする。

2.2 原義

まずモノ・コトの原義を確認しておく。既に言語学的見地のみならず、哲学、民俗学その他様々な観点からの定義付けが試みられているが、それらを参考にして拙稿では以下のように定義する。

モノ：具体的な存在物

コト：変化し得る事象

3. サンプルの蒐集

実質と形式

以下の現代短編小説10篇から、モノ・コトの全ての用法を抽出し、名詞、文末定型表現、接続助詞・副助詞、終助詞、その他の用法別に分類・整理した。得られたサンプルの延べ語数はモノが333、コトが444であった。

- | | |
|---------------------|-------------------------|
| 『かわうそ』(向田邦子・1980年) | 『井戸の星』(吉行理恵・1975年) |
| 『亡妻の昼前』(辻井喬・1984年) | 『帰って行く母』(小檜山博・1984年) |
| 『浅い眠り』(岩橋邦枝・1976年) | 『水晶』(野呂邦暢・1972年) |
| 『宇宙船』(佐江衆一・1982年) | 『マンハッタン島の女』(山田智彦・1976年) |
| 『雨ごもり』(高橋揆一郎・1984年) | 『肌ざわり』(尾辻克彦・1979年) |

以下にモノ・コトの様々な用法を使用頻度と共に概観する。

4. モノの用法

4.1 名詞(の一部)としてのモノ(238例)

「探しモノ、卑怯モノ」等のモノは複合名詞の構成成分として頻繁に現れる。漢字を使用した場合〈物〉と表記される例は異なり語数48、延べ語数113、〈者〉と表記される例は異なり語数5、延べ語数7であった。

モノが名詞の構成成分ではなく単独で名詞として使われる場合も多いが、修飾語を受けない用法はわずか7例に留まる。「口にモノを入れながら」のように形をもつ物体を表すモノが4例で、残りは靱山(1991)が「虚辞」と呼ぶ「モノの考え方」のようなモノであった。

何らかの修飾語を受ける用例は111例観察された。そのうち、前置される修飾部及び後続する述語の性質等から判断して、明らかに形を持つ物体を指示していると考えられるモノは44例、人間を指示していると考えられるモノは11例であった。

4.2 文末定型表現の一部としてのモノ(41例)

繫辞ダがモノに後接したモノダは、話し手の主観を表す助動詞(モダリティ)等の固定化された表現形式となる場合がある。このようなモノダを意味別に分類すると、感慨が15例、当為が4例、回想が4例、本質が1例であった。他には、モノダロウという形式で解説を表す用例が1例、トイウモノダが12例、ヨウナモノダが2例見られた。タマッタモノデハナイという慣用表現も2例見られた。

二二

4.3 接続助詞・副助詞の一部としてのモノ（15例）

接続助詞としては、モノダカラ（6例）、モノナラ（4例）、モノノ（3例）、モノデ（1例）が見られた。^⑥モノダカラのうち2例は接続される前件・後件のうち後件を省略し文末で終助詞的に用いられており、次節に見る終助詞モノとの連続性を感じさせる。副詞節を形成する⁽¹⁾のようなトイウモノも1例あった。

(1) 長髪というものが一般化されてからトイウモノ、あの遠浅の海岸線はたしかに少くなりました。[肌ざわり：1019]

4.4 終助詞（の一部）としてのモノ（24例）

終助詞として理由・根拠を示す用法のうち、モノ単独で使用されているのは16例、ネを伴ってモノネの形で現れるのが4例、ナを伴ってモノナの形で使用されているのが1例であった。モノカという形式で反語的な意味を表す用法も3例見られた。

4.5 その他の用法のモノ（15例）

4.5.1 形容詞・形容動詞の一部としてのモノ（10例）

モノウイ・モノグサナ等形容詞・形容動詞の一部としてモノが用いられている例は異なり語数6、延べ語数10であった。

4.5.2 モノノ（1例）

モノに助詞ノが付加された形式で連体詞として機能するモノノが1例見られた。「モノノー、二分」という用法である。

4.5.3 ソノモノ（2例）

分解すると「連体詞+モノ」となるが、一語で名詞に後続する接尾語的な役割を持つソノモノの例が2例見られた。「顔は彫りの深いグリークの女ソノモノだった」のような用法である。

4.5.4 モノダロウカ（1例）

(2)に掲げるモノダロウカは、モノが「あれ」で示される内容と対応する実質名詞的な用法と取ることもできるし、モーダルな意味を担う形式化されたモノとも考えられる。カの助けもあってモノダロウカは全体として終助詞的になっている。

(2) あれだけは何とか回避できないモノダロウカ。[肌ざわり：1024]

4.5.5 介在のモノ（1例）

(3)に掲げるモノは、修飾節と外^⑦の関係を持っており、安達（1998）が「介在」と呼ぶ現象である。この用法については6.2.2にて触れる。

(3) 二人共、彼が承諾したモノと決めて、いっしょについてきた。[マンハッタン島の女：968]

5. コトの用法

5.1 名詞(の一部)としてのコト(325例)

名詞構成成分としては、「仕ゴト」のように漢字表記で〈事〉が宛てられる場合が異なり語数15, 延べ語数43であった。

コトが単体で修飾を伴わずに使用されているのは、「コトを納めた」の1例のみであった。

修飾語を受ける用法では、「修飾」のコト」の形式が多用されその総数は86例に及ぶ。修飾部には殆どの場合名詞が立つが、「よくよくのコト」のように副詞が立つ場合や「追い立てられるようにしてのコト」のような例も見られた。他には、連体詞による修飾が42例、形容詞による修飾が22例、動詞による修飾が20例、形容動詞による修飾が13例、「ようなコト」等助動詞を受ける例が11例見られたのに加え、「同じコト」「道学者めいたコト」が各1例見られた。

修飾部と外との関係を結ぶ「名詞化辞」^⑧のコト(次節に見る文末定型表現内のコトを除く)は73例、修飾部とコトの間にトイウが立つ用法が12例見られた。

5.2 文末定型表現の一部としてのコト(109例)

寺村(1981, 1984)は、ムードの助動詞として忠告・勧告のコトダと感嘆のコトダを区別するが、今回の調査では寺村が前者の否定形とするコトハナイが2例見られただけである。しかし、固定化した文末表現としては、過去の経験を示すコトガアル/ナイ(49例)、可能を示すコトガデキル/デキナイ(16例)、事態の反復を示すコトガアル(12例)、決定を示すコトニナツタ(9例)、伝聞を表すトイウコトダ(6例)、帰結を示すコトニナル(5例)、決定を示すコトニシタ(4例)、二重否定で肯定を表すナイコトモナイ・コトモナイデハナイ(各1例)、さらには慣用表現的なドウツテコトナイ(4例)が見られた。

5.3 接続助詞・副助詞(の一部)としてのコト(7例)

コトを含む接続助詞的あるいは副助詞的な表現も存在するが、一語として辞書の見出し語になる程の独立性は持たない。今回のサンプルでは「行ってみないコトニ八わらない」のようなコトニハが1例、「驚いたコトニ」のようなコトニが4例、形式的には形容詞+コト)でありながら時間副詞句となる「長いコト」が2例見られた。

5.4 終助詞としてのコト(1例)

Okamoto(1995)は、終助詞としてのコトに感嘆と命令の働きがあることを論じているが、今回の調査では命令を示すコトの用例はなく、感嘆を表す用例もわずか1例で

あった。

5.5 その他の用法のコト(2例)

以下のようなコトダロウが2例見られたが、これはコトを省略しても文法性が保たれる特殊な用法である。^⑩

- (4) ここからは見えないが、さっき通った裏通りの黒いアスファルトも濡れているコトダロウ、と男は想像した。[水晶：912]

6. 実質性と形式性

6.1 観察の基準と概況

語の実質性・形式性を客観的になおかつ精密に計量する基準を我々が持っているわけではない。しかし、意味的いどの程度原義が派生的な用法に反映しているかは、観察者の主観が入り込む余地が大きいにせよ、一基準としてはかなり有効であると思われる。また、品詞の転成が生じる場合は、名詞の性質がどの程度継承されるのかも一基準になり得るであろう。

今回得られたサンプルの延べ総数から名詞・形容詞・形容動詞の構成成分であるモノ・コトを差し引くとモノが⁴203、コトが⁴401である。そのうち、単独の名詞としてなおかつ修飾語を受けずに用いられているのはモノが7例、コトが1例と非常に稀であり、従来この2語が典型的な形式名詞とされてきたのもうなずける。しかし、修飾語を受けながらもモノが形をもつ物体を表す例が多く見られたが、これらはモノの原義たる「具体的な存在物」を示す実質用法と見なすべきである。コトの場合も、内の関係を持つ動詞・形容詞や連体詞等を受けた場合は明らかにその原義たる「変化し得る事象」を示しており、これらも実質用法と言える。一方、終助詞のモノ・コトからそれらの原義を見て取ることは難しく、またデス・マスを受けることから、それらが名詞としての意味・文法的性質が消失した形式用法であることがわかる。そのような終助詞のモノは24例見られたが、コトはわずか1例であり、形式化がその究極にまで到る傾向はモノの方が強いと言える。

6.2 中間用法の存在

連続性において実質と形式を捉えるということは、即ち実質名詞用法のような「典型としての実質」と、終助詞用法のような「典型としての形式」を両極に配置した上で、中間に位置する用法の存在を仮定することである。筆者が中間的と見なす用法は多数あるが、ここでは紙幅の都合により2点だけ取り上げる。

6.2.1 「人物名詞」のコト

「人物名詞」のコト」という形式は27例見られたが、このような用法は2種に区別される。

- (5) 社長がね、君のコトを話したら早く釈放してくれたんだ。[亡妻の昼前：738]
 (6) 母が私のコトを息子だと思いついたのかどうか、顔つきからはわからない。[帰って行く母：1044]

(5)のコトは「君」に纏わる情報・事柄を示す実質的な用法であり削除することはできない。一方、(6)のコトは「私」という個体を直接的・明示的に指示することを避け、客体化して表示するために使われており、モノをコトで包み込むという「コト」的な表現への指向性の強い日本語の性格〔池上(1981：259)〕の現れである。このような用法はコトの原義と関連があるとはいえ希薄であり、削除可能なことから形式化の進んだ中間用法であると考えられる。

6.2.2 解説のモノダ・モダリティのモノダ

4.2において、モノダロウによる解説を表す用法について述べた。実例を(7)に掲げる。

- (7) してみれば彼が出たあとで目醒めて明りをともしたモノダロウ。[水晶：915]

これは揚妻(1990)が「状況解説」と呼ぶ用法で、先行状況を主題としその成因を述べる働きがある。このような解説用法は、文末定型表現のモノダ(ロウ)の中にあってはかなり異質な用法である。例えば、坪根(1994)はモノダが持つ多彩な表現性を「一般性」というキーワードで横断的に捉えようとした試みであるが、解説のモノダだけは「一般性」で説明できないとしている。また、解説用法のモノダが客観的な表現と認識され報道等に頻用されることも、話し手の主観を表すモダリティのモノダとは大きく異なる点である。しかし、ここでは解説のモノダを例外的な用法とすることを避け、モノと修飾節が緊密な内の関係を持つ(8)のような、単なる名詞述語モノダ(モノデアル)とそのような修飾・被修飾関係が弛緩し曖昧になっている(9)のようなモダリティのモノダとの橋渡しの用法であると考える^⑪。このようにモノダの様々な用法の中にも連続性があると考えるのである^⑫。

- (8) 胡桃は、右手の麻痺の回復にいいと聞いて、厚子が買ってきたモノデアル。[かわうそ：772]
 (9) ひどいことをするモノダ。[帰って行く母：1041]

従来、先行節に体言の資格を与えることが形式名詞の特徴とされながらも、名詞化辞として扱われてきたのはコトとノのみであった^⑬。しかし、モノをも名詞化辞と認めるこ

とにより、解説用法では先行する節が現在形・過去形のいずれであっても接続が可能なことや、場合によっては純粋な名詞化辞であるノとモノとの間に互換性が見られること¹⁴等も理解し易くなる。安達(1998)は、トオモウやダロウ等の認識の表現の前に現れるモノ・コトを分析し、根拠に基づいた推論として捉えられた事態にはモノ、真偽に対する態度を決められない事態にはコトが用いられるとしているが、これも名詞化辞としてのモノ・コトの使い分けが日本語に存在することを証明していると言えよう。用例³⁾のモノも同類の名詞化辞である。実質・形式の観点からすれば、解説のモノダ、モダリティのモノダはともに典型的な形式用法に近接した中間用法であり、モダリティのモノダの方が解説用法に比してモノの独立性が弱まっているだけ形式化の進んだ用法と考えられる。

7. 範疇としての形式名詞と文法化現象

今回のサンプルはあくまでテキストからの共時的なデータである。先に触れたようにモノ・コトの名詞から助詞への転成は文法化現象の一例であると考えられるが、通時的な証拠や談話資料からのサンプルを提出しない限り、そのような転成を文法化現象として断定的に論じることはできない¹⁶。しかし、共時を通時の一断面と捉えるならば、今回統計的に観察されたモノ・コトの複数の品詞にまたがる用法は文法化プロセスのある一時点での現状を示していると言える。文法化現象が「あらゆる言語に発見され得るプロセス」〔Heine et al. (1991: 2); 筆者訳〕であることを考えれば、国文法においてかなり定着している形式名詞という範疇、さらにはそれを恰も日本語独特のものとして扱う態度にやはり問題があると言わざるを得ない。モノ・コトのみならず、同じく典型的な形式名詞とされてきたワケ・トコロ等も助詞への転成を見せることを考えれば、転成しやすい、つまり文法化現象を生じやすい名詞に与えられた名称が形式名詞であるに過ぎないと言えよう。

また、拙稿に見た実質と形式の中間に位置付けられるモノ・コトの存在とそれらの用法の中にも形式化の程度において差異が見られるという事実は、形式名詞と実質名詞の明確な二項対立が成立し得ないことを示している。従って、名詞は形式的にも実質的にも機能することがあり、形式用法を取り易い傾向(モノ・コト等)、取り難い傾向(固有名詞等)というように、それぞれの名詞が形式化に関して各自傾向を持つと捉えるべきであろう¹⁷。その傾向を決定付ける要因として、語義の抽象度のような語彙的要素や、文末述語を形成しやすいか否かのような構文的要素等が複雑に絡み合っていると考えられる。

8. おわりに

拙稿に見たモノ・コトの様々な用法は日本語名詞の機能性を象徴的に明示している。日本語において名詞が持つ特に重要な機能は繋辞ダと共に名詞述語を形成することであろう。冗長的と感じられる英語表現⁽¹⁰⁾に対応する日本語表現⁽¹¹⁾が全く問題を感じさせないのも、日本語において名詞述語文が確固たる地位を占めているからに他ならない。

(10) That person is a kind person.

(11) あの人はいい人だ。

日本語の文は「客観的・素材的な成分」から「主観的・陳述的な成分」へという語順になっている」〔玉村（1992：12）〕が、元来客観的・素材的な成分である名詞が繋辞ダと融合し一体となってモダリティのような主観的・陳述的な成分に転成するのも、日本語が名詞によって文を締める傾向が強いからこそ可能となる。同様の傾向を持つとされる諸言語との対照研究をも視野に入れた「機能する名詞」の研究のさらなる発展に期待したい。

注

- ① 拙稿は1999年1月マッセイ大学（Massey University, New Zealand）に提出した修士論文「Syntax and semantics of the nominals *mono* and *koto* in Japanese」の一部を基にしている。
- ② 例えば、奥津（1974：203）は「形式名詞なる語類は、日本文法の記述において必要がない」と述べている。
- ③ 大野（1974）、廣松（1975）、荒木（1980）、初山（1990）等参照。
- ④ これら10作品は『昭和文学全集第32巻』（小学館 1989年）に収められている。作品のサイズを知る目安として、通常の文末句点に加え作中人物の会話を閉じるかぎ括弧をも句点と見なした上で調査した文の総数を以下に掲げる。

『かわうそ』	203文	『雨ごもり』	470文	『水晶』	641文
『亡妻の昼前』	451文	『井戸の星』	389文	『マンハッタン島の女』	335文
『浅い眠り』	531文	『帰って行く母』	569文	『肌ざわり』	862文
『宇宙船』	363文				

なお、サンプル抽出の際の基準は以下のように設定した。

- ・複合語の構成成分であるモノ・コトも用例として扱う。
- ・漢字の使用は、モノの場合「物」と「者」、コトの場合「事」がありうるが、明らかに字音語と考えられる場合はモノ・コトの用法に含めない。
- ・口語形モンもモノとして扱う。

また、拙稿に文例を掲載した場合、作品名と『昭和文学全集第32巻』における頁番号を付記した。

- ⑤ 初山（1991）は、統語的制約を満たすために挿入される意味を担わないモノを「虚辞」とする。

- ⑥ モノを含む接続助詞にはモノヲもあるが、今回の調査では1例も見られなかった。
- ⑦ 「内の関係」は被修飾語が格助詞を付加することによって連体節内に挿入できる場合を指し、「外の関係」は挿入できない場合を指す。
- ⑧ 「Nominalizer」の訳語として便宜上「名詞化辞」と呼ぶが、純粋な辞と捉えるわけではない。
- ⑨ 命令を示す終助詞コトは、通例告示文において用いられる。
- ⑩ このようなコトについての研究として初山(1995)がある。
- ⑪ 解説用法ではないが、拙稿の(2)に掲げた用例も同じく橋渡的な用法である。
- ⑫ 寺村(1984)は、以下の2用例を挙げ、前者を本性・本質を表す「名詞モノ+ダ」、後者を当為のムードを表す助動詞としているが、この2用法も少なからずモノダの連続性を感じさせる。またこのようなモノダと名詞モノの意味的な繋がりを論じたものに揚妻(1991)がある。
- (a) 病人はいつも自分より軽症の者に嫉妬を感じるモノダ。
- (b) 男の子は泣かないモノダ。
- ⑬ 久野(1973)のように引用のトを含める立場もある。Horie(1997)は、現代日本語にコト・ノ・無標(Zero nominalization)の3種の名詞化を認める。
- ⑭ ノとモノが交換可能な場合として、揚妻(1990)に以下の用例が挙げられている。
- (a) このひどい惨状は、台風が通ったノだ。
- (b) このひどい惨状は、台風が通ったモノだ。
- ⑮ 安達(1998)は、モノを形式名詞と称しながらも、モダリティ・思考動詞の直前に現れるモノが補文標識としての役割を果たすと考える点で、モノに名詞化辞の機能を認める数少ない論考の一つである。
- ⑯ 通時的資料に基づいて、ワケの文文化を論じたものにSuzuki(1998)がある。
- ⑰ 「性格・感じ」等、新屋(1989)が「文末名詞」と呼ぶ語群の存在も、通常形式名詞とされない名詞の中に形式化される傾向の非常に強いものがあることを示している。
- ⑱ 角田(1996)は、アイヌ語、朝鮮語、蒙古語、トルコ語、チベット語に日本語に類似した名詞述語構造があると述べている。

参考文献

- (1) 揚妻祐樹(1990)「形式的用法の「もの」の構文と意味 解説」の「ものだ」の場合」『国語学研究』30
- (2) 揚妻祐樹(1991)「実質名詞「もの」と形式的用法との意味的つながり」『東北大学文学部日本語学科論集』1
- (3) 安達太郎(1998)「認識の意味とコト・モノの介在」『世界の日本語教育』8
- (4) 荒木博之(1980)『日本語から日本人を考える』朝日新聞社 [= 荒木博之(1985)『やまとことばの人類学 日本語から日本人を考える』朝日選書293]
- (5) 池上嘉彦(1981)『「する」と「なる」の言語学 言語と文化のタイポロジーへの試論』大修館書店
- (6) 大野晋(1974)『日本語をさかのぼる』岩波書店
- (7) Okamoto, Shigeko(1995) Pragmaticization of meaning in some sentence-final particles in Japanese. In *Essays in semantics and pragmatics: in honor of Charles J. Fillmore*, eds. Masayoshi Shibatani and Sandra A. Thompson. John Benjamins.
- (8) 奥津敬一郎(1974)『生成日本文法論』大修館書店

- (9) 久野暁 (1973) 『日本文法研究』大修館書店
- (10) 新屋映子 (1989) 「“文末名詞”について」 『国語学』 159
- (11) Suzuki, Ryoko (1998) From a Lexical Noun to an Utterance-final Pragmatic Particle: *Wake*. In *Studies in Japanese Grammaticalization: Cognitive and Discourse Perspectives*, ed. Toshio Ohori. Kuroasio Publishers.
- (12) 高市和久 (1986) 「形式名詞」と名詞の形式化」 『国語学研究』 26
- (13) 高市和久 (1987) 「形式的な名詞述語文」 『国語学研究』 27
- (14) 玉村文郎 (1992) 「日本語概説」玉村文郎編 『日本語学を学ぶ人のために』世界思想社
- (15) 角田太作 (1996) 「体言締め文」鈴木泰・角田太作編 『日本語文法の諸問題 高橋太郎先生古希記念論文集』ひつじ書房
- (16) 坪根由香里 (1994) 「「ものだ」に関する一考察」 『日本語教育』 84
- (17) 寺村秀夫 (1981) 「「モノ」と「コト」」馬淵和夫博士退官記念国語学論集刊行会編 『馬淵和夫博士退官記念国語学論集』大修館書店 [寺村秀夫 (1993) 『寺村秀夫論文集Ⅰ 日本語文法編』くろしお出版に再録]
- (18) 寺村秀夫 (1984) 『日本語のシンタクスと意味Ⅱ』くろしお出版
- (19) 廣松渉 (1975) 「物と事との存在的区別 語法を手掛りにしての予備作業」 『理想』 509 [廣松渉 (1979) 『もの・こと・ことば』勁草書房に再録]
- (20) Heine, Bernd et al. (1991) *Grammaticalization: A Conceptual Framework*. The University of Chicago Press.
- (21) Horie, Kaoru (1997) Three types of nominalization in Modern Japanese: *no*, *koto*, and *zero*. *Linguistics* 35- 5
- (22) 初山洋介 (1990) 「現代日本語「モノ」の諸相」 『Litteratura』 11
- (23) 初山洋介 (1991) 「修飾語句を伴わない「モノ」の意味・用法」 『言語文化論集』 XIII-1
- (24) 初山洋介 (1995) 「文末の「～コトダロウ」における「コト」の意味分析 「ダロウ」に「コト」が付くことによる意味の変容」名古屋・ことばのつどい編集委員会編 『日本語論究 4 言語の変容』和泉書院